溶接ニュース（産報出版）
第3369号（2021年1月5日）7面

山下 順一さん

山順工業（大分県）

1986年、大分県初の溶接日本一。2005年、全国初の高校生溶接競技会を実現。誰も成しえなかったその功績を立てるまで、山下さんは茨の道を乗り越えてきた。

早々に挫折を味わった。18歳の時だ。造船所の訓練生として溶接を覚え、自分なりに手応えを感じながら現場に入った。そこで先輩から声がかかり、ティグ溶接を任される。ところが二つ返事で引き受けたのに、全くうまく溶接できない。「下手くそ、荷物をまとめて故郷へ帰れ」と怒鳴られた。

恥ずかしさと悔しさで眠れなかった。なんとか見返そうと、人に見られないよう隠れて毎日練習した。1週間後、先輩に「大丈夫か」と言われながらも再びティグ溶接に挑戦。見事な溶接で先輩を感心させた。自分自身の溶接と初めて真剣に向き合うことになった、忘れられない経験だ。

その後、溶接日本一を目指す山下さんに壁が立ちはだかる。全国溶接技術競技会の関門となる大分県の競技会を突破できなかった。再出場を申し出たが、会社から認められなかった。それでも全国に挑戦したい、と必死で取引先の会社に頼み込んで出場権を借りた。その後会社を離れた山下さんは、数回にわたるチャレンジの末、溶接日本一を勝ち取った。大分県初の快挙だ。

高校生の溶接競技会も、実現までに多くの困難があった。今日でこそ、高校生競技会は全国的に行われているが、山下さんが立案した当時は反発も少なくなかった。調整先が多いうえ、その必要性がなかなか理解してもらえない。最後は県庁に出向いて直談判し、やっとの思いで実現した。「大分県は高校生競技会の原点であり、全国のリード役になってきた。だからこそ、どんな状況でも我が県の競技会を守り続けていきたい」

現在、県内の大学・短大・高校に出向いて溶接を指導。県立工科短大では溶接の客員教授を務める。「大分県代表として日本一になれた恩返しがしたい」と、手塩にかけて育てた生徒を地元企業へ送り出す。

教え子から「入社して溶接を褒められる。高校で山下さんに教わって良かった。溶接と巡り会えてよかった」、そんな言葉をかけられたとき、心底「指導して良かった」と感じる。

溶接で大切にしているのは「リズム・集中力・忍耐力」。その勘所を伝えるため、指導では必ず生徒の手を取り、自身の運棒を体感させる。「手本を単に見せるのではなく、生徒と同じ目線で一緒に溶接する。この方法で指導すると、短い時間でも上達する」。山下さんは現在、自分の跡を継ぐ指導者の育成を急ぐ。「教え子が成長し、大分県の溶接業界をリードする存在になってほしい」

「自分の技術を社会のために役立てたい」という山下さん。「溶接日本一も、高校生競技会の開催も、決して諦めなかったから実現した。困難な中でも味方になってくれる人は必ずいる。これからも信念を貫いて、次は自分の会社で花を咲かせたい」

山順工業の飛躍に向けて日々汗を流している。